TalesofGraces **f** StrikerS

柴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Tales of Graces f Strikers

【Nコード】

N2037T

【作者名】

柴

【あらすじ】

アスベル、ソフィ、リチャードの三人はふたたび友情の誓いをすめるために花畑に着ていた。そこで謎の輝きをくらって気を失ってしまふ。そして目を覚ましたらそこは魔法が発達した世界だった。

プロローグ

アスベル達がフォドラの核を停止して、ソフィの中にリトルクイーンが眠りについてから約半年がたった。

ラント裏山の花畑

ア「着いたぞ2人とも。」

ソ「うん。」

リチャ「ようやく来れたな3人で。」

ア「そうだな……でもリチャードいいのか？城から出て。仕事、まだ片付か無いんだろ。」

リチャ「ああ…我がウィンドルが出した各国の損害への賠償金やその他もろもろ沢山仕事が残っているが…デールが少し息抜きしてはどうか、と言ってくれたのでな。こうしてアスベルのところまで来たんだ。」

ア「そうか、デール公が…」

リチャ「それに、もう1度ここで友情の誓いをしたかったんだ。君たちと8年前のように。」

ア「そうだな。」

ソ「うん、もう一度やる！」

3人は友情の誓いをした樹の元に行くと、そこには赤い水晶が落ち

ていた

ア「何でこんな所に水晶が…」

すると、いきなり水晶が輝き出し3人を包みこんだ

ア「な、なんだ!…!」

ソ「アスベル…!」

リチャ「これは一体!?…!」

輝きができたら、そこには3人の姿も消えていた。

『到着、ミットチルダ』

ア「うん……ここは、たしか……」

アスベルが目を開けると見渡すかぎりの水面が広がっていた

????「アスベル……」

ア「その声は……ラムダ！」

声のする方に意識を向けると赤紫色の球体のラムダがいた。

ア「お前はフォドラの意識を吸収して眠っているはず……」

ラムダはフォドラの核の意識を吸収したため今はアスベルの中で眠りにについているはずが、なぜか今、アスベルの前に姿を表している

ラ「外が騒々しいのでな目が覚めてしまった。…それよりお前はまた厄介な事に巻き込まれたようだな。」

ア「厄介な事？」

ラ「お前の体は今、空間の狭間を漂い別の次元に向かっている。」

ア「別の次元！？どうにか戻れないのか？」

ラ「それは無理だ。今お前の体を崩壊しないように守るのが限界だ。」

「

ア「そうか、じゃあソフィとリチャードは!？」

ラ「リチャードとプロトスー(ソフィ)も我の力の中にある。」

ア「そうか…よかった。」

ラ「もうすぐ空間の狭間を抜ける…お前は早く行け。」

ア「わかった、ありがとうラムダ、助かった。」

ラ「ふん……な!なんだ!何かに引っ張られる!」

ア「ラムダ!どうしたんだ!ラムダ!」

ラ「わからん。何かに吸い込まれている!…ぬあああああ!」

ア「ラムダ!うあああ…」

ラムダが叫びながら消えると視界が真っ白になった

バツ

ア「ラムダ!…ここは。」

アスベルが目覚めるとそこは森の中だった

ア「ラムダ!返事をしろ!ラムダ!」

ラ《なんだ、アスベル？》

ア「ラムダ！よかった無事だったんだな。」

ラ《いや、無事ではない。》

ア「え、大丈夫なのか？…というかどこから声が…」

ラ《お前の左腕だ。》

ア「左腕？…あれ、こんなもの着けていたか？」

ラ《それが、我だ。》

アスベルが左腕を見ると、そこには赤紫色をした、ひし形の石がはめ込まれたブレスレットが巻いてあり、そこからラムダの声が聞こえていた

ア「ラ、ラムダ？」

ラ《そうだ、どうやら次元を越えた時、我はこのような形になったらしい。》

ア「なんだ、それ。それとここっ」うツ！……「いったい何が起こったんだ。」リチャード！気がついたのか。」

リチャ「ああ…いったい何が起こったんだ？」

ア「わからない。」

リチャ「そうだ、ソフィはどこに…」

ア「…!! そうだソフィ!!」

しかし見渡してもどこにもソフィの姿がなかった

ア「いけない! 早く見つけないと!」

ガサガサ 「アスベル…」

ア「ソフィ! そこにいたの…か…?」

リチャ「ソフィ…キミ、戻ってる…?」

茂みから出てきたソフィは、フードラでリトルクイーンを取り込む前の子ども姿に戻っていた

ソ「アスベル、これを見て。」

ソフィはアスベルに手に包まれていた物を見せた

ア「…!! これは…リトルクイーン!?!」

ソフィが持っていたのは全長30センチぐらいのリトルクイーンだった

ラ《どうやら、そいつにも次元を越えた影響が出たみたいだな。》

そうラムダが言っていると

リ「……ここは？…あ、ソフィ無事でしたか。」

ソ「うん、あなたのおかげ。」

ア「どうゆう事だ？ソフィ。」

ソ「うん、わたしが目を開けるとそこにはお花畑があって、そこでこの子が私たちは今、別世界に向かっているって言うていたの。その後目を開けると、そこに倒れていたの。」

ラ「そこで我からこの状態について言うておきたいことがある。…まずここは別世界だ、そしてこの世界は魔法が発達した世界であると言うことだ」

リチャ「魔法が発達した世界？」

ラ「ああ…その他にも……」

ラムダは他に、こうなった原因はアスベルが拾った水晶で、自分とリトルクイーンはこの世界で言うデバイスにあたること、この世界では剣などの武器は使用禁止と言うこと、そして帰る方法が無いということ

リチャ「そんなことになるなんてな。」

ア「ああ、けどなんとか帰る方法を探さないと。」

リチャ「とりあえず森を出よう。」

ソ「うん。」

3人は森をでるために歩き始めた。

しばらくすると、少し開けた所にでた

ラ「アスベル、何か近付いて来てるぞ。」

ア「なに!？」

すると周りから青い機械が30機ぐらい襲ってきた

ソ「襲ってくる!」

ラ「アスベル、セットアップと言え。そうすれば我がお前の武器となるぞ。」

ア「本当か!」

リ「ソフィ、あなたも。」

ソ「わかった。」

ア・ソ「セットアップ!」

セットアップしたラムダとリトルクイーンはそれぞれの武器になった。

ラムダは見た目が銀色と黒の線で出来た父の形見の剣“エクスカリバー”がアスベルの腰に

リトルクイーンは“リズレット”の模様と水晶が緑色になった物がソフィの両手に装備された

リチャ「僕も戦うぞ！」

リチャードも腰から“カイザーレイピア”を抜いた

ア「いくぞ、みんな！」

sideなのは

な「こちら、スターズ1とライトニング1。ロングアーチへ、もうすぐ次元振が観測された地点に到着します。」

「了解、そのまま移動してください。」

な「了解。」

私とフェイトちゃんはこのあたりで観測された小規模な次元振の調査に向かっていた。

「こちらロングアーチ！観測地点周辺にガジェット反応多数！それと生態反応を確認しました。おそらく民間人だと思われます！ただちに急行してください！」

な「民間人が…了解！　いくよ！フェイトちゃん！」

フェ「うん、なのは！」

私たちは現場に急いだ。

sideリチャード

リチャ「せい！は！」

リチャードは向かってくるガジェットを切り倒している。

リチャ「瞬迅剣！」

ガジェットを突き刺したら

リチャ「散沙雨！」

連続で突きを繰り返す

リチャ「断空剣！」

ガジェットを巻き込みながら舞い上がり

リチャ「くられ！鳳凰天駆！」

炎をまといながら、ガジェットに飛び込んでいく

リチャ「まだいるか！……この技で沈め！翠緑の暴風！アベンジャ
ーバイト！」

リチャードが術を発動すると、ガジェットが風の牙に噛み砕かれた

リチャ「一瞬で決める！」

リチャードがエレスを開放し

リチャ「剣閃よ唸れ、疾風のように！ヴァーテクス・ローズ！！」
剣に風をまとい、鋭い斬撃がガジェットをバラのように散らした

S i d e o u t

s i d e ソフィ

ソ「やつ！たあああ！双竜脚！」

ソフィはガジェットを得意の格闘でどンドン倒していく

ソ「双月！」

ガジェットを2回転の蹴りでしとめ

ソ「やあああ！獅子戦吼！」

闘気を獅子の形に打ち出して、ガジェットを蹴散らし

ソ「マークリバーズ！」

ガジェットに光子（光の粒子）をブーメランみたいに投げて破壊する。そのすきにガジェットが後ろに回りこみ中央のカメラからレーザーを撃ってくるが

ソ「はっ！…おとなしくしなさい！」

ソフィはそれを宙返りでかわし空中から光子を放射状に放つ“シエルスロー”をくりだした

ソ「やるよ！リトルクイーン！」

リトル「ええ、行きましょう。」

ソ「全部破壊する！…燃えろ！ 焼き尽くす！ 火龍炎舞！！！」

とどめに炎の連撃をたたみ込んだ

Side out

sideアスベル

ア「はっ！そこだっ！潜身脚！切り裂け！烈空刃！！」

アスベルはラムダを帯刀しながら流れるようにガジェットに攻撃をくりだし次々とガジェットを破壊していく。

ア「次！ 魔神剣！」

ア「そこを動くな！破壊桜！」

剣を地面に突き刺し衝撃波がガジェットを襲う

ア「はっ！邪霊一閃！ ふっ！幻魔衝撃破！！」

紫電のまとった剣でガジェットを切った後、そのいきおいのまま他のガジェットをXを書くように切り裂いた

ア「跡形もなく、消える！魔王炎撃波！！」

そして周りのガジェットをすべてを焼き尽くす焔で燃やし尽くした

ア「終わらせるぞ！ラムダ！」

ラ「ふん、さつさと片をつけるぞ」

アスベルは大技を出すためにすばやくガジェットに近ずき

ア「はああああ！閃く刃は勝利の証！…白夜殲滅剣！！」

ガジェットをすりぬけながら斬り裂き、最後のガジェットに連続で攻撃を叩き込んだ後、鞘に剣を納刀した

S i d e o u t

アスベル達はそれぞれガジェットを破壊した

ア「ふう、そつちも終わったか？」

リチャ「ああ、すべて倒したぞ！」

ソ「こつちも終わったよ。」

ア「よかった、みんな無事で……それにしてもこれはいって「あの！その人たち！」ん？なんだ？……えっ！」
アスベルが声をかけられたほうを見ると、空から人が飛んで来たのだった

S i d e o u t

S i d e なのは

私とフェイトちゃんがガジェット反応があった地点に向かっている

フェ「なのは！ガジェットの反応が……」

な「うん。どんどん消えていくね。」

いったいどうして？

な「とにかく、急ごうフェイトちゃん！」

フェ「うん。」

私たちは急いで反応が消えていく地点に向かうと、そこにはガジェットの破壊している人たちがいた。

な「あの人たちは一体……？」

RH《マスター、あの3人のうち2人からデバイス反応があります。》

な「デバイス反応が？」

RH《それと微弱ながら、レリックに似る反応も確認しました。》

な「レリックが！」

RH《Yes、おそらくレリックに反応したガジェットに巻き込まれたのではないでしょうっか。》

な「そうかもね。」

な（でもあの人たちがガジェットを圧倒している。いったい何者？」
フェ「なのは、終わったみたいだよ。どうする？」

どうやら私が彼らが何物かを考えているうちにうちに終わってしまったみたい。

な「とりあえず、話しかけてみるよ。……あの〜！その人たち！」

Side out

ア「あなたたちは!？」

アスベルは警戒しながら空からやってきた、なのはたちにたずねた

な「私たちは時空管理局 機動六課の者です。」

「時空管理局？聞いたこと無い名前だ。」

ラ「あたりまえだ。ここはエフィネアでは無いのだぞ。」

ア「ああ。そうだった。……それで何のようですか？」

な「私たちはここに、そこにあるガジェットドローンの反応があつてきました。あなたたちはどうしてここにいたのかな？」

ア「俺たちはあの森から来たんだ。そうしたらあの機械たちがいき

なり襲い掛かってきたんです。」

リチャ「それより、ここはなんて言うところなんだい？」

フェ「ここはミットチルダ、ここを知らないとなると、あなた達はどこからきたの？」

ソ「私たちはエフィネアからこの水晶を使って来たみたいなの。」

ソフィは、なのはたちに拾ったときとは少し色あせた水晶をみせた

フェ「これは…レリック！」

な「やっぱり、反応があつたとおりだね。」

フェ「でも、感じられる魔力かなりちいさいね。」

ア「それが何なのか知ってるんですか！？」

な「うん…それよりあなたたちの話を聞くと、どうやらあなたたちは次元漂流者みたいだから、私たちといっしょに機動六課についてきてほしいんだけど、いいかな？」

ソ「次元漂流者って何？」

フェ「次元漂流者というのは、次元規模の迷子みたいなものかな。そして私たち次元管理局のお仕事の中に、あなたたちみたいな次元漂流者を保護する事も入っているの。」

な「だから、私たちについてきてほしいの。その、レリックって名

前なんだけど…そのレリックの事もそつちで説明するから………」

ア「どうする？リチャード、ソフィ？」

ソ「私はいいと思う。」

リチャ「僕もいいよ。それに…女性のからのお誘い、断るわけには
いかないからね。」

ア「あははは…それじゃあ、お願いします。」

リチャードの言葉にアスベルは苦笑いしながらも、なのは達についていく事をきめた

な「あつ！そついえばまだ名前を言ってなかったね。…私は高町なのは。」

フェ「私はフェイト・T・ハラオウン、よろしくね。」

ア「俺はアスベル・ラントです。」

ソ「私はソフィ・ラント。」

リチャ「リチャードだ、よろしく。」

な「よろしくね、3人とも。」

こうして、アスベル達は機動六課に行くことになったのだった

『到着、ミットチルダ』（後書き）

次はアスベル達の設定を書いていこうと思います。

〈設定〉（前書き）

アスベル達の設定です。
（随時更新予定）

〈設定〉

『アスベル・ラント』

年齢・19歳

身長/体重・175cm / 65kg

クラス・剣士

1人称・俺（場面によっては私）

好物・甘口のカレー

好きな事・掃除

嫌いな事・仲間を大事にしないこと、仲間はずれにされること

デバイス・ラムダ

詳細

本作の主人公。ソフィ、リチャードと共にミットチルダ流れついた。半年前、ソフィを養子に取り、治癒術で紛争で負傷した人々を助けるために世界を回っているシェリアの帰りをソフィと共に待っていたが、今回の事件で別世界に来た事を知ったシェリア心配かけるんじゃないかと少し不安になっている。

性格は曲がった事が嫌いですが少し熱血が入っている。仲間や大切な者をとっても大事にしている。

『ラムダ』

クラス・インテリジェントデバイス

1人称・我

通称・ラムダ

好きな事・眠る事

嫌いな事・眠りを妨げられる事

所持者・アスベル・ラント

詳細

かつてエフィネアを滅ぼそうとした存在。少し前までアスベルの中で眠りに付いていたが、次元移動のさい謎の現象によってデバイス

と言う形になってアスベルの左腕にブレスレットに付いている。

しかしこれは、ラムダの意識がデバイスに移っただけなのでラムダ本来の力はアスベルの中なので、アスベルの左目は紫色になったままである。

性格は非常に博識で、パスカルが出そうとした答えをわざと先に回答して彼女を落ち込ませるなどマリク曰く「相当な捻くれ者」だがアスベルやアスベルの仲間のピンチの時はほっておけないツンデレである。

『ソフィ・ラント』

年齢・13歳（外見年齢）、（ユニゾン時）18歳（外見年齢）

身長/体重・148cm / 39kg（ユニゾン時）165cm

m / 45kg

クラス・光子格闘

一人称・わたし

好物・カニタマ、麻婆豆腐

好きな事・花を育てる事

嫌いな物・大切な人を傷つける者

デバイス・リトルクイーン

詳細

半年前の事件をきっかけにアスベルとシェリアの養子になり今はソフィ・ラントと名乗っている。

ソフィはラムダを倒す為に作られたヒューマノイド“プロトス1”であり歳を取らないので容姿はかわらなかったが、フォドラでリトルクイーンの欠片を取り込んだおかげで見た目が18歳に体の構成が人間のそれに近くなった。

性格は感情は乏しかったがこの半年で明るくなり、そして純粹で子供っぽい性格になった。好物はカニタマと麻婆豆腐、麻婆豆腐はこの半年のうちに好きになり、とくに激辛が好きだ、そしてカニタマのことになると性格が変わる。

『リトルクイーン』

クラス・ユニゾンデバイス

一人称・私

通称・リトル

好きな事・自然を感じる事

嫌いな物・自然を傷つける者

所有者・ソフィ・ラント

参照

フォドラの核が生み出したフォドラクイーン（リトルクイーン）の欠片から生まれたユニゾンデバイス。

前のリトルクイーンとは別の存在で人間にそんなに敵意は無い、けど自然を大切にしないやつらの事は嫌っている。

性格は生まれただけだからか少々子どもっぽい所がある。自然の中にいるのが好きなのか草木がある所ですごしていることが多い。

『リチャード』

年齢・20歳

身長/体重・178cm / 67kg

クラス・細剣士

一人称・僕

好物・味噌汁、納豆トースト

好きな事・友とのかけがえの無い時間

嫌いな事・裏切られる事

デバイス・未定

ウィンドルの国王でアスベル達の親友。かつて世界に大打撃を与えてしまった事に対し、自ら魔物討伐に当たる。その姿のおかげで各国の統率者並みかそれ以上の人気を誇っている。その人気ぶりは彼をモチーフにしたキーホルダー類やお菓子類の販売が計画されるほどである。本人は嫌がっている。

劇画や物語などが大好きらしくそれを元に行っているのか、センスが少し変である。
性格はかなりお茶目である。

〈設定〉（後書き）

大人ソフィの身長や体重はかつてに推測したものです。
ソフィの好物は作者の趣味です！

『機動六課』（前書き）

遅くなりました。できれば一週間に1話のペースで書いていきたいです。
ではどうぞ。

『機動六課』

アスベル達はあれから“ヘリコプター”と言う乗り物に驚きながら乗り、機動六課まで移動した

な「さあ、ここが機動六課の隊舎だよ。」

ア「ここが…機動六課。」

ソ「白いね。」

リチャ「ほう、なかなか綺麗な建物だ。」

それぞれが機動六課を見てそれぞれ、思ったことをつぶやいた

フェ「じゃあ、まずは部隊長の所に案内するね。」

ア「部隊長、ですか？」

な「そう、私たち機動六課の部隊長。“八神はやて”部隊長。」

そしてアスベル達は隊舎の中に入り部隊長室を目指していた、その道中アスベルは考えていた

ア（部隊長か、一体どんな人なんだ？名前からすると女性だと思っ
が……）

な「さあ、ついたよ。………部隊長、さきほど報告した次元漂流者をおつれしました。」

「????「ああ、ごくろうさん。入ってもええで。」

ア「ん？」

ドアの向こうでからの声に少し違和感を覚えながらアスベル達は部隊長室に入っていった

フェ「八神部隊長、次元漂流者三名、お連れしました。」

は「ご苦労さん、二人とも…それと、もう敬語はいいで。」

な「うん、はやてちゃん。」

フェ「了解、はやて。」

部隊長室に入るとそこには、赤い髪を三編みのおさげにした女の子とピンクの髪をポニーテールの女性がおり、その間に座っている女性、はやてにフェイトが敬礼しながらアスベル達の事を報告すると、はやては労いと口調を元に戻してもいいことを二人に言った。そしてアスベル達を見て

は「はじめまして。私が機動六課の部隊長、八神はやて言います。君達やな？ガジェットを倒した次元漂流者は。」

ア「はい、私はラント領領主、アスベル・ラントです。」

ソ「ソフィ・ラントです。」

リチャ「ウィンドル国現国王リチャードです。」

は「ほりリチャード君は国王様か、よろしくや三人とも、ほんでこっちはシグナム、こっちはヴィータや。」

シ「うむ。」

ヴィ「よろしくな。」

はやては両隣にいるシグナム、ヴィータを紹介し、シグナムはうなずき、ヴィータは返事をした

ア（なんだろう…どっかで聞いた声なんだけ、どこで聞いたんだろう…）

は「……それでいきなりやけど、三人にお願いが有るんや。」

ア「お願い、ですか…？」

は「そや…三人には機動六課の民間協力者になってもらいたいんよ。」

な「!!はやてちゃん!？」

ア「どうしてですか？」

はやての突然のお願いになのは驚き、アスベル理由をたずねた

は「まあ、アスベル君達を民間協力者にさそつた理由は四つある、まずアスベル君とソフィちゃんが持っているデバイス、本来は許可なく所持しちゃあかんものや、二つ目にソフィちゃんの肩にすわつとる……えくと、名前はなんて言うんや？」

はやてはソフィの肩に乗っているリトルクイーンに名前をたずねた

リトル「私は…リトルクイーン。」

は「リトルクイーンか、ちょお長いなあ…そや、名前を短めてリトルなんてどうやる？」

リトル「リトル……」　クルツ

リトルクイーンはソフィの方に向いた

ソ「いいと思うよりトル。」

リトル「…『クルツ』…リトルで、いい。」

は「よっしゃ！じゃあ話を戻すとリトルは珍しいユニゾンデバイスや、きちんと許可取らんと最悪研究対象になって二度と帰れんかもしれへん。三つ目なのはちゃんから送ってもらった映像を見せてもろうたけど、リチャード君が出した魔法は、ミッド式ともベル方式ともちゃう、そやからさっきのリトルと同じ理由で元の世界に帰れんかも知れない。これが最後で、私にとって一番の理由なんやど。…この六課は新設の部隊や、せやから戦力は多いにこしたことは無い。それにガジェットを倒すほどの実力や、戦力としては申し分無いからな。もちろん三人の衣食住はきちんと保障するし、元の世界も六課が全力で探したる。…どや、協力してくれないやるか？」

リチャ「なるほど、僕達の安全を保障するかわりに、僕達は君達に協力しろ…と。」

は「まあ、言い方はちょうあれやけど、そうゆうことや。」

リチャ「ふむ…だが、異世界に来て何も無い僕達の衣食住を用意してくれるのはありがたいな…アスベルどうする？」

ア「俺はかまわない。…ソフィはどうしたい。」

ソ「私もいい。」

ア「わかった…では部隊長「ああ、私のことは、はやてでええで。歳もそう離れてないみたいやし、それと敬語も気にせんでええよ。」…じゃあはやて、俺達は、はやてたちに協力するよ。」

は「よっしゃ！じゃあ、さっそく三人の部屋に「主はやて。」…ん？シグナム、どうしたん？」

部屋に案内しようとしたはやてを止めたのは、シグナムだった

シ「主はやて、彼らと模擬戦をさせてもらえませんか？」

は「模擬戦？アスベル君達と？」

シ「はい！」

ヴィ「またでたよ、シグナムのバトルマニアが。」

シグナムは少し興奮しながら模擬戦の提案をし、それを見たヴィー
タはあきれていた

は「そやな〜アスベル君たちのデータはもう少し欲しいからなあ。どうやるか？3人とも？」

ア「俺達はいいですよ。」

は「でもさすがにシグナム一人で三人の相手さすわけにはいかんからな〜……よし！ならフェイトちゃんとヴィータ、二人も参加してくれへんか？」

フェ「私も？」

ヴィ「はやてのたのみなら、しゃあね〜な。」

シグナムの提案を聞いたはやては、フェイトとヴィータも模擬戦に参加させることにした

は「よし。じゃあ対戦順は、ヴィータ対ソフィちゃん、フェイトちゃん対リチャード君、シグナム対アスベル君の順でええか？」

六人は頷いた

は「よし、じゃあ早速、訓練スペースに行こか。ああ…なのはちゃん、みんなを連れてきてな。」

な「うん、了解。」

こうしてアスベル達は模擬戦に参加する事になったのだった

『機動六課』（後書き）

次からは模擬戦が続きます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2037t/>

TalesofGraces f StrikerS

2011年10月9日01時32分発行